

英国セントマークス病院研修レポート

亀山仁史

平成二十七年十月二十四日～十一月二十二日まで、英国 London のセントマークス病院での海外研修の機会をいただきました。皆様ご存知とは思いますが大腸肛門疾患では世界有数の歴史ある施設であり、著名な医師も数多く在籍しておりました。大腸癌分類で有名な Dukes や痔核手術の Goligher、Milligan や Morgan、大腸癌手術の Miles、家族性大腸腺腫症、潰瘍性大腸炎で有名な Parks、Nicholls ら枚挙にいとまがありません。昭和五十八年には畠山勝義前教授が Nicholls 先生よりご指導を受けられたという縁もございます（同窓会誌第九号、四十号参照）。外科同窓会の皆様には、大腸手術で主に使用されているセントマークス鉤でもお馴染みかと思えます。今回の訪問中でも実際に使用されておりました。大・中・小とそれぞれ二本ずつ、六本セットで用意されていることもありさすが本場だと感心した次第です。何故かラパロ横行結腸手術の際にも用意されていました。

今回私が参加した研修は、Postgraduate teaching term という外科研修プログラムでした。一日数コマの講義（消化器外科、内科、放射線科、内視鏡、病理など）と手術見学、Multidisciplinary team (IBD)、骨盤、放射線・病理) 参加、外来見学などが四週間のスケジュールとして組み込まれています。大腸肛門病専門施設ですので、大腸癌、炎症性腸疾患のみならず、小児外科疾患、便秘症、肛門痛、バイオフィードバック、ポリポリス、腸管不全など、通常では学びにくい領域についても詳細な講義があり大変勉強になりました。その他、リサーチの発表会や小腸移植に関する会議などにも参加することができました。一日数時間、英語の講義を聴講することは私にとってハードルが高いものでした。しかし、どの講師の先



Prof. Nicholls

生方も、講義をすることに情熱を持っており、聴衆に理解できるように伝えることが使命であるというプロフェッションリズムが伝わってきました。教官であることの意義・責任を強く感じた次第です。

私が最も楽しみにしていた講義は Prof. Nicholls の講義でした。パウチ手術を含む大腸肛門領域の権威であり、英国の外科医の中でも近寄り難い雰囲気漂わせている大御所の先生であると同っておりました。潰瘍性大腸炎の手術に携わっている者として、W型回腸囊手術の第一人者の先生にお会いしたいという思いが強く、この講義のためだけでも参加したいと思っておりました。当日は遠足前の子供のように朝早く目が覚め講義室に向かったところ、かなり早い時間に Nicholls 先生が登場しました。思いがけず二人で話ができる時間が有り、光栄でした。実際の Nicholls 先生の講義は非常にわかりやすく、パウチ手術の歴史そのものというお話で、あつという間に時間が過ぎました(写真)。

一緒に学んだメンバーはオーストラリア、オーストリア、ルーマニア、中国、マレーシア、そして私。一か月行動を共にした仲間であり、今もメールで連絡を取り合う良い関係を築くことができました。各国それぞれ医療事情は異なります。医師教育システムから給料休暇のことまで本音で語り合えました。「日本の外科医は三六五日、二十四時間オンである」と冗談めかして言ってみたときには、冗談にすらなっていないのか、そもそも理解してもらえなかったのか、寂しそうな反応をされました。どのように伝わったのか定かではありません。

セントマークスでは癌の化学療法はほとんど行っておりませんでしたので、地下鉄の駅で三つほど西に行った地区にある Mount Vernon Cancer Centre の見学をお願いしました。教授の Robb 先生は蝶ネクタイの似合う実に柔和な先生でした(私の事前調査が足りず、プレゼントは通常のネクタイにしてしまいました)。日本の外科医は化学療法も行っている!ということがある部門へ行っても驚きとして紹介されました。ここでは専門看護師のシステムが確立しており、地位に応じて責任と裁量権が決まっ

ているようでした。最終確認は Robb 先生が行いますが、看護師による確かな判断がなされ、スムーズに外来診察が行われていました。Robb 先生の外来はコーヒーでも飲みながらサロンにでもいるような、そんな雰囲気でも和やかでした。肛門管癌の照射治療後、機能が落ちたことに対して患者からの質問があり、日本との違いを感じました。

若手医師の時間外手当を減らす法律が持ち上がり、ストライキを起こす機運が高まっていたり、救急医療に対応する医師の不足、ロンドン以外でのいわゆる地方における医師不足、外国人医師のあり方など、問題点もいくつか見受けられました。家庭医と専門医が分離されており、専門医を受診するまでに数か月要することもありますが、原則として医療費の自己負担はありません。救急外来も無料なので待ち時間が長くなり救急医療として成り立っているのかどうか微妙なところも感じました。

准教授・総括医長という身分でありながら不在になるという「暴挙?」をお許しいただいた若井教授はじめ教室員の皆様、外科同窓会の先生方、医局スタッフの方々すべての皆様にご場をお借りして厚く御礼申し上げます。

わずか一か月の経験ではありましたが、私の外科医人生の中での大きなターニングポイントになったと思います。私の使命はこの経験を後輩へと引き継ぐことだと思っています。日本人のセントマークス病院への研修はおそらく八年ぶりであったと伺いました(本当に短期の病院見学などはあったものと思いますが)。折角、世界有数の一流施設が門戸を開いてくれているのですから、チャンスを生かすべきだと私は思います。そんな中、本年度はまた新潟から田島陽介医師が研修に参加することとなり、日本の新潟をアピールできるのではないかと嬉しく思っています。

(平成九年入会)